

5 熊本県内の曾畑式土器出土遺跡

乙益 重隆

九州における曾畑式土器を出土する遺跡は熊本県地方に最も多く集中している。中でも九州中央山地の西麓一帯には、丘陵部の尖端や谷をめぐって有力な遺跡が少なからず分布している。しかるにこうした一連の遺跡は、従来ほとんど組織的な調査が行なわれたことなく、ただ表面採取資料によって判定されているにすぎない。そしてこれらの遺跡では、単純に曾畑式土器だけを出土することがなく、必ず他の各種遺物と混在しながら採取されるのが通例である。従ってここにのべる35箇所⁽¹⁾にわたる遺跡・遺物の概要は、きわめて杜撰なものであるが、今後の研究を進める上の手がかりとなることを期待して、あえて紹介することにした。

1 玉名郡天水町字竹崎竹崎貝塚

竹崎貝塚は鹿児島本線「肥後伊倉駅」の南方約2.3キロ、水田中に孤立した丘の西側斜面にある。この丘は元来離島であったが、自然の干陸と人工的な干拓によって周辺が水田化し、今では陸地につながってしまった。この貝塚は昭和28年8月田辺哲夫氏によって試掘され、その時貝層内より乳頭状の四脚をもった深鉢形の土器が出土した。しかもその器面には九州では珍しい斜行縄文や半截竹管による爪型文などがほどこされ、中には頸部に刻み目凸帯をめぐらしたものもみられた。同様な例は最近福岡県宗像神社沖ノ島や、阿蘇郡西原村別辻・下益城郡城南町阿高貝塚などにも出土し、田辺氏はとくにこれら一連の土器を竹崎式と名づけた。その他にも竹崎では層序関係がわからないが、若干の轟式・曾畑式・阿高式の破片が検出され、幾つかの文化期が重複していることがわかる。とくに曾畑式土器は細片にすぎないが、器形も文様も曾畑貝塚のものと大差なかった。

2 同郡同町字尾田尾田貝塚

この貝塚は竹崎の東方約1.5キロ、尾田川の谷口に位する鹹水産の貝塚で、昭和37年8月田辺哲夫・田添夏喜氏らによって発掘調査が行なわれた。幸いその時の調査には和島誠一・麻生優氏をはじめ、乙益も参加の機会を得た。いずれ詳細については田辺氏の報告によるとして、ここにはその概要だけを紹介したい。

遺跡の中心は現在部落の中央にある地藏堂附近と考えられるが、全体の規模はかなり広範囲にわたり、地点によって文化期を異にした遺物が出土する。中でも地藏堂の境内では、南北（第1）と東西（第2）～二つのトレンチを掘って調べた結果、両者ともほぼ同様な結果を得た。すなわち第1トレンチの北側では、上層に阿高式とわずかな竹崎式を出土し、下層及び貝層下には轟式を出土した。同じトレンチの南側では、上層に阿高式と少量の竹崎式、下層に丸底の波状または山形口縁をなした轟式が出土し、最下層、つまり貝層下には曾畑式が群をなして発見された。もちろんこれらの貝層のうち上層部には所々攪乱された部位もあったが、轟式と曾畑式の層は殆んど旧態のままを存し、来離物をみななかった。第2トレンチも同様で、この地点は基磐が東西にわずかばかり傾斜していたが、上層に阿高式と竹崎式、中層に轟式、下層及び貝層下に曾畑式が出土した。

このように尾田貝塚における轟式と曾畑式との前後関係は、われわれがかつて宇土市曾畑貝塚で経験した例や、小林久雄氏が松橋町宮島貝塚で得られた結果と大いにくいちがうものがあり、如何ともしがたい。しかし尾田の轟式は、いわゆるみみずばれ細隆起線文や貝殻連点文・刺突連点文などもあるが、器形が波状または山形口縁の丸底に限られている点に留意される。故に目下の段階では、同じ轟式にも

長い生命と伝統があり、曾畑以前から曾畑以後にかけて存在し得たという解釈が成立するかもしれない。いずれにしてもこうした問題は近き将来に委ねなければならない。尚この貝塚では、他に地点を異にして御手洗A・B、御領式、黒川式なども採取されている。

3 菊池郡旭志村字岩本開拓地

阿蘇外輪山の秀峰鞍岳の西麓には、縄文早期をはじめ弥生を経て、土師・須恵にいたるまで、おびただしい遺跡が群集している。中でも岩本部落の北方智者峯（393.6米）の北麓に位する小川開拓地では、押型文・轟式・御領式などとともに曾畑式土器が採取されているが、遺跡の実態は明らかでない。

4 同郡同村字牟田平

本遺跡も鞍岳の西南麓をめぐる遺跡群の一つで、近世に構築された湯船ノ溜池の近くにあたる。中でも西につづく丘陵の高い部分を俗に牟田平と称し、古くから押型文・撚糸文土器が出土することによって知られる。その他坂本経堯氏によると轟式や擦消縄文のある土器にまじって、曾畑式土器がかなり検出されるという。

5 同郡同村字松ヶ平

本遺跡は矢護川にのぞむ小高い丘陵上にあり、やはり前にのべた鞍岳の西南麓をめぐる遺跡群の一つである。坂本経堯氏によると、ここでも縄文・弥生各種の土器にまじって曾畑式土器が検出されている。

6 菊池郡大津町字御願所七ノ尾

本遺跡は鞍岳西南麓の丘裾が、ひくく横たわった頂部附近にあり、撚糸文をはじめ押型文・阿高・西原・西平・御領など各形式の土器にまじって、曾畑式土器が発見されている。ことに坂本経堯氏は本遺跡から出土する「阿高式土器の太い凹線文間の高い部位に二歯或は三歯ある櫛歯をもつて連点」したものを、七ノ尾式とよんでおられる。

7 同郡西合志村字野々島

鞍岳山麓がゆるやかに西にのびた広大な台地は俗に合志原とよばれ、古くから先史遺跡の豊富な地域として知られる。本遺跡もその一つで、坂本経堯氏によると押型文・撚糸文土器のほかに、曾畑式土器が相当量検出されるという。

8 菊池市大字水源字古川

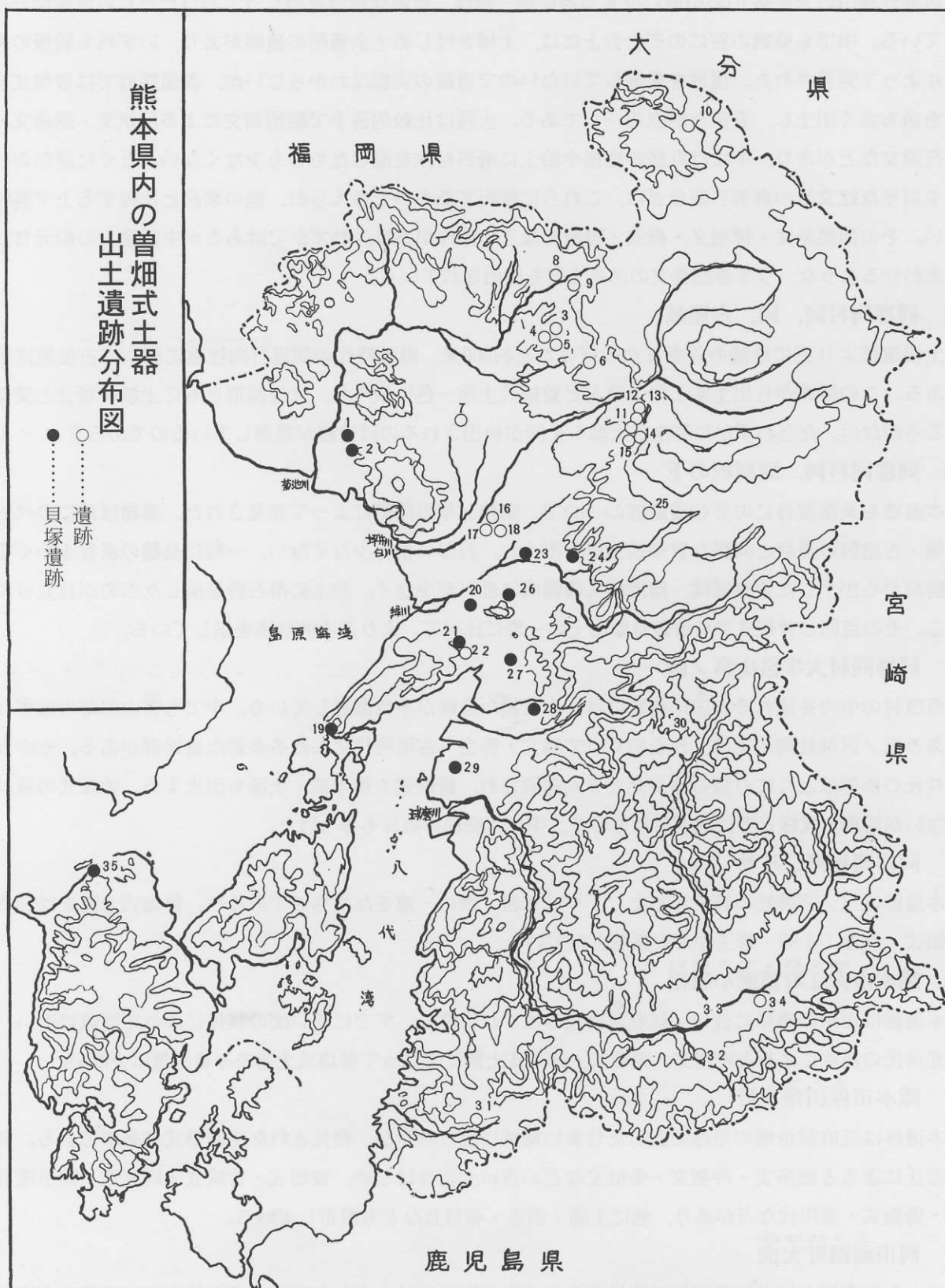
菊池川の水源は阿蘇外輪山麓のせまい溪谷より発している。その溪谷にのぞむ傾面には多くの遺跡が分布しているが、余り一般には知られていない。古川遺跡もその一つで、従来曾畑式土器を最も多く出土している。土器片はいずれも典型的な細型刻文からなり、胎土に滑石粉末を混じたものが少なくない。恐らくそれらに伴ったと思われる石鏃や、打製磨製の石器が採取されているが、開墾時の発見であるため遺跡の実態が明らかでない。

9 菊池市大字水源字伊野開拓地

本遺跡は古川遺跡より更に上流にさかのぼること約2キロ、菊池川水源溪谷にのぞむ山麓台地上にあり、広大な畑地の各所に点々と遺物の群集をみるという。坂本経堯氏の試掘成果によると押型文・撚糸文・轟式・曾畑式・阿高式・西平式・御領式・夜臼式その他弥生式土器など、およそ各時期にわたる遺物が出土し、打製磨製の石器も少なくなかった。ことにそれらの遺物は、地点を異にして一応のまとまりがみられ、伊野一帯の台地がいかに長期間にわたって縄文時代人の生活舞台となったかがうかがわれる。尚本遺跡では後期の縄文式土器群に混って、クジャク石の勾玉が出土している。

10 阿蘇郡南小国町大字満願寺字ヒゼンユ

阿蘇外輪山の北側斜面にあたる小国地方では、深い溪谷をめぐって多くの遺跡が分布するが、あまり開発が行きとどいていない。ここにのべるヒゼンユは、小国川の支流田ノ原川にのぞむ小規模な遺跡であるが、遺物の出土量と種類は少なからぬものがあつた。坂本経堯氏の調査によると燃糸文・押型文などの古い土器をはじめ轟式・曾畑式・阿高式・鐘ヶ崎式・西平式・西原式・御領式・ワクド石式など多



彩をきわめ、石器も一通りのものがそろって出土したという。現地は住居跡と考えられるが、何分発掘面積がせまく、遺物の層序関係や共伴関係については明瞭でない。いずれその詳細については坂本氏の報告が公にされるはずである。

11 同郡西原村大字小森字桑鶴土橋

阿蘇外輪山の秀峯・倭山の山麓に位する西原村一帯は、複雑な溪谷をめぐっておびただしい遺跡が分布している。中でも桑鶴の谷にのぞむ台上には、土橋をはじめ十余箇所の遺跡があり、いずれも戦後の開墾によって発見された。現地を発掘していないので遺跡の実態はわからないが、表面採取では曾畑式土器を最も多く出土し、有望な地点の一つである。土器は比較的薄手で細型刻文による羽状文・鋸齒文・平行線文などがあり、中には丸底の底部や胎土に滑石粉末を混じたものも少なくない。とくに縦形の石匙や扁平な蛇文岩の磨製石器などは、これらに伴出するものと考えられ、他の類品と比較する上で興味深い。その他撚糸文・押型文・轟式・御領式などの細片があり、わずかではあるが中国地方の船元B式を思わせるような、うず巻凸帯文のある土器も検出されている。

12 同郡同村同、同、古屋敷

土橋遺跡より更に桑鶴の谷をさかのぼること約600米、旧藩時代の間道日向往還に面して古屋敷遺跡がある。この遺跡から出土するのは殆んど曾畑式土器一色に限られ、文様器形ともに土橋の場合と変るところがない。ただわずかに弥生式土器や土師が検出されるのは遺跡が重複しているのであろう。

13 同郡同村同、同扇坂の下

本遺跡も桑鶴溪谷にのぞむ遺跡群の一つで、昭和34年の開墾によって発見された。遺物は前にのべた土橋・古屋敷の場合と同様な曾畑式土器を出土し、石器の量も少なくない。一般に桑鶴の溪谷をめぐり遺跡群から出土した曾畑式は、器面の文様構成に乱れが少なく、胎土に滑石粉を混じたものが目立っている。その点同じ曾畑式でも曾畑貝塚出土の一群に比べて、より基本的な姿を呈している。

14 同郡同村大字宮山宮ノ西

西原村の中央を流れる布田川流域には、小規模な遺跡が多数散在している。中でも宮山部落のはずれにある三ノ宮神社周辺では、丘をめぐって縄文・弥生・古墳時代にわたる多彩な遺跡群がある。そのうち神社の西側はとくに打製石器がたくさん採取され、曾畑式や西平式・土師も出土する。曾畑式の量は少ないが器形・文様ともに典型的なもので、中には底部の破片もみうけた。

15 同郡同村同ひろせ

本遺跡は三ノ宮神社の裏手にあたり、やはり宮ノ西の一連をなすものであろう。曾畑式土器をはじめ御領式・須恵・土師・管玉などが採取されている。

16 熊本市大江町渡鹿小磯原

本遺跡は白川の南岸に近い、託麻原台地のはずれに位し、すでに長い間の耕作によって煙滅に近い。東光彦氏の採取によると押型文・御領式・弥生式土器にまじって曾畑式土器をみる量が量が少ない。

17 熊本市保田窪本町

本遺跡は託麻原台地の地隙に面したせまい地域に限られるが、発見された土器形式は多彩である。東光彦氏によると撚糸文・押型文・条痕文などの古い土器をはじめ、曾畑式・竹崎式・阿高式・御手洗B式・御領式・黒川式などがあり、他に土師・須恵・布目瓦なども散布している。

18 同市画図町大曲

広大な託麻原台地が沖積平野に変換する江津湖の周辺には、点々と遺物の散布地をみかける。東光彦

氏によると大曲遺跡では曾畑式・阿高式・西平式土器が採取されているが、遺物の散布状態が散漫で、遺跡の性格も明らかでない。

19 宇土郡三角町大字波多字立畠際崎貝塚

本遺跡は三角湾にのぞむ波多部落台地の先端部にいとなまれた貝塚で、豊富な貝を包含している。崖面に露出している貝層は、浅い部分で約10層、深いところで1.50米以上もある。発掘調査していないので層序関係がわからないが、轟式・曾畑式・阿高式・出水式などが採取され、昭和29年には人骨も一体出土した。

20 宇土市曾畑貝塚

本文に詳述したので省略。

21 同市宮ノ荘 轟貝塚

本遺跡は宇土山塊の丘裾に構成された貝塚で、大正9年清野謙次博士らによって発掘調査が行われた。ついで昭和33年には小林久雄・松本雅明氏らによって発掘され、新しい知見がいろいろと加わった。貝塚の規模は広範囲にわたり、土器の種類はきわめて多種・多様である。しかも地点によって文化期の相異があるらしく、層序の状態も攪乱された所が多く一様ではない。従来検出されている土器には撚糸文・押型文・轟式・曾畑式・並木式・阿高式・出水式・鐘ヶ崎式・西平式・御領式などがあり、弥生式土器では下伊田式・城ノ越式・黒髪式がみられ、他に須恵や土師もある。松本雅明氏によると轟式は四類に大別され、曾畑式は殆んど検出されなかったという。恐らく出土地点を異にするのであろう。

22 同市馬場神山中坪

中坪遺跡は宇土半島の山地と、神馬部落の孤丘との間にはさまれた低い沖積地帯にあり、恐らく遺物は最寄りの周辺台地から転落したのであろう。水路の断面にみえる包含層によると、地表下約20層に土師・須恵の層があり、地表下約1.20米に轟式と曾畑式の包含層がある。遺跡の性格が明らかでないが、轟式も曾畑式も典型的なもののばかりで、全体に器面が磨損しているのは、洗い流されたためであろう。

23 上益城郡嘉島村大字上六嘉字カキワラ貝塚

この貝塚は熊本平野のかなり奥まった六嘉台地の西南縁に位し、現在の海岸線から15キロ以上も遠かった地点にある。貝塚は台地の断崖面にかかり、純鹹水産の貝より成る。そのために層序が乱れていて一概に信頼できないが、出水式と一部の御手洗B式を含む層から人骨8体がならんで発見された。出土遺物には押型文・撚糸文・曾畑式・出水式・鐘ヶ崎式・御手洗B式・武式・西平式・御領式などがあり、更に弥生式土器の黒髪式・須玖式や須恵・土師もあり、それらの出土状態は著しく乱れていた。しかし曾畑式の出土層はやや地点を異にし、貝層のはずれの比較的浅いところから、二箇体分の大きな破片を検出した。一箇分は幾何学的な鋸歯文と直線文のくりかえし文様から成り、他の一箇分は乱れた平行線文を描き、両者ともに一括出土した。

24 同郡御船町辺田見貝塚

この貝塚は緑川の支流御船川をさかのぼった谷口に近い、辺田見部落の南端にある。遺跡の規模は小さいが、表面採取によると出水式・鐘ヶ崎・御手洗A式・市来式のほかに少量の曾畑式があり、その実態は明らかでない。

25 同郡同町大字七滝字間伏附近（俗称 御池原）

阿蘇外輪山の連峯が西南方に流れる裾野一帯は、俗に大矢野原とよばれ、広大な原野が起伏している。中でも御池原とよばれる高原（海拔約400米）には干無田・間伏など、有力な縄文式遺跡があり、おびた

だしい遺物が出土している。現地を踏査した東光彦氏によると、遺跡の範囲はいずれも広大にわたり、遺物も各時期にわたって多彩をきわめている。表面採取品によって分類すると押型文・捺糸文・条痕文・轟式・曽畑式・並木式・御手洗B式・市来式・西平式・御領式・黒川式などがあり、他に弥生式後期の土器や土師・須恵もみられた。とくに曽畑式には胎土に滑石粉を混じたものや、文様構成の整然としたものが多く今後の調査が期待される。

26 下益城郡城南町字阿高貝塚

熊本平野の南縁を劃する木原山（標高314.4米）の北麓には、有名な阿高貝塚と御領貝塚とが谷をへだてて対峙している。中でも阿高貝塚は大正5年以来数回にわたって発掘され、多くの遺物を出土した。しかるにその層序関係については明らかでなく、今では甫調査の必要にせまられている。従来発見されている土器の主体をなすのは阿高式であるが、他に押型文・捺糸文・曽畑式・並木式・竹崎式なども少量ながら出土している。

27 同郡松橋町大字豊福字両仲間宮島貝塚

この貝塚は八代平野の北縁にのぞむ、豊福台地のはずれにあり今は煙滅に近い。かつてこの貝塚を試掘した小林久雄氏は「表層及び次の混土貝塚上部には弥生式土器、それより貝層上部には連点文及び細型刻文の曽畑式土器を出土し、最下層には細帯隆起土器がある」報じておられ、曽畑式よりも轟式が古いのではないかという予測を下された。しかるに前にのべた尾田貝塚では、その逆の結果があらわれた。いずれにしても曽畑と轟は、時間的にきわめて近い前後関係にあったことだけは確かであろう。

28 八代郡竜北村字四ッ江貝塚

五箇荘山地の西麓砂川の谷口附近には、竜北村大野・同西平・同土穴瀬など、有力な貝塚が少なくない。四ッ江貝塚もその一つで、花岡興輝氏の採取品によると曽畑式・鐘ヶ崎式・御手洗A式・武式・西平式・三万田式・御領式などがある。中でも曽畑式は量的に少ないが文様・器形ともに典型的なものである。

29 八代市産島産島貝塚

産島はもと孤島であったが、近代の干拓によって陸つづきとなった。貝塚は島の東南側にあり、規模は小さい。江上敏勝氏によると少量ではあるが押型文土器と、明瞭な曽畑式土器が採取されている。しかし何分にも短時間の表面採取調査によるものであるだけに、遺跡の実態はわからない。

30 八代郡泉村下鶴泉村第四中学校内

五箇荘山地の山深い下鶴は、球磨郡五木村に接した僻陬の地である。現地は袋状をなした溪谷の傾斜面にあり、徳永隆憲氏によると中学校の敷地を拓いたさいに、おびただしい縄文式遺物を出土したという。土器は捺糸文・押型文・轟式・並木式・出水式などがあり、中には曽畑式とみられる一群が含まれている。とにかく九州山地の最も山深い五箇荘地方にも、こうした遺跡があることは注意しなければならない。

31 水俣市宝河内

水俣川の上流溪谷に面した宝河内の台地には、広い地域にわたっていろいろな時期の遺物が散布している。斉藤俊三氏の採取品によると押型文土器をはじめ、轟式・並木式・阿高式・御領式などがあり、中に明瞭な曽畑式土器片を見出した。

32 人吉市木地屋町鳴石

球磨川の支流胸川の上流溪谷には、未開発の遺跡が少なくない。現地踏査不十分なため詳細を記せないが、岡直温氏の採取品によると、木地屋部落に近い谷沿いの小平坦地から曽畑式土器が出ていること

がわかった。しかし破片から推定される文様は、一般に刻文が浅く沈線化した感があり、また直線文は弧線化する傾向がみられるので、或は曾畑式そのものというよりも、日勝山式ではないかという疑を存する。

33 同市願成寺町上ノ寺

本遺跡は人吉市の東北部を限る願成寺丘陵の一部にあり、近くには胴部に二段のふくらみをもった平底の押型文土器を出土した石清水遺跡がある。上ノ寺出土遺物の主体をなすものは手向山式であるから、ここにのべる曾畑式の破片も、手向山式にあらわれた曾畑式文様の踏襲かもしれない。一般に手向山式にあらわれる曾畑系の文様は、施文が浅くて荒く、著しい退化現象がみられる。

34 球磨郡免田町字黒田岡留神社東側

本遺跡は白髪岳山麓よりゆるやかな傾斜をもって北に流れる、扇状地の尖端部に位し、昭和22年の開墾によって発見された。出土遺物の主体をなすものは手向山式一色に限られる。したがって本遺跡では、たとえ曾畑系文様の土器片を含んでいても、その実態は手向山式とみるべきである。ことに本遺跡出土の曾畑系文様の土器片は、日勝山式にみられるような弧線が発達しており、中には文様間の空隙に、荒い縄文をうずめたものさえみられる。

ちなみに手向山式土器は鹿児島県大口市手向山出土を模式とするもので、肥薩国境を中心とする山岳地帯だけに、特異な分布を有する疑問の多い土器である。器形は口縁部がやや開き気味な深鉢状を呈し、胴部は折れて明瞭な菱線をなす。そして菱線上にはしばしば綾杉状の鎖つなぎ文様や、同心円の連続文などがあらわれ、底部は浅い上げ底になるものが多い。器面の文様は内外に早期の土器に特有な捺糸文を施したⅠ式をはじめ、楕円・山形・格子目の押型文を有するⅡ式、縄文を施したⅢ式などがあり、更に轟式の文様を踏襲したⅣ式、曾畑式を踏襲するⅤ式、日勝山式を踏襲したⅥ式などにわけられる。このように手向山式は、九州における早期の土器文様を、一定の器形に集成的に包括していることから、恐らくその時期は前期初頭頃の所産ではないかとみられている。ことに前述した人吉市石清水の押型文土器のごときも、やはり手向山式の一種とみなされ、現段階ではまだ未解決の問題が多分に残っている。

35 天草郡五和町大字二江沖ノ原貝塚

本遺跡は天草下島の北端、通詞島に対峙する砂丘上にいとなまれた貝塚で、昭和33年坂本経堯氏を中心とする調査団によって発掘が行われた。遺跡の規模は広範囲にわたり、地点によって文化期を異にする。中でも汀線に近い貝塚では、各貝層に出水式を中心にその前後関係を示す有力な土器群が出土した。更に貝層下の砂層には轟式を主とする尖底土器や、典型的な曾畑式土器が出土したが、それらの前後関係を分離することはできなかった。その他地点を異にして御領式・黒川式・弥生式土器・須恵・土師などがあり、石器をも含めて集計すると莫大な量に上る。いずれにしてもその結果は、近刊される報告書にまちたい。

註

- 1 竹崎貝塚についてはまだ報告された文献がない。
- 2 小林久雄「肥後縄文土器編年の概要」考古学評論第1巻第1号（昭和10年）
- 3・4 坂本経堯「小国田ノ原—考古随想—」プリント私刊（昭和26年）
- 5・6・7・8 「山西村誌」（昭和34年）
- 9 松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告」『考古学雑誌』第47巻第3号（昭和36年）

- 10 橘孝文「宇土市轟大字馬場に発見せる曽畑式土器」ともし火 5 号, 宇土高校社会部
- 11 乙益重隆「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」日本考古学年報 8（昭和30年度）
- 12・13 註 2
- 14 小林久雄「九州の縄文土器」人類学先史学講座Ⅱ（昭和14年）
- 15 寺師見國「南九州の押型文土器」古代学第 2 巻第 2 号（昭和28年）